

# 螻蛄の斧

(とうろうのおの)

## 社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第11回

### 団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

いじめ問題で大津の中学校が全国区の渦中になったとき、「第三者委員会には団さんが選ばれると思ってた」と言った人があった。何を根拠にそんなことを思うのか分からなかった。しかし、あそこはかつて私が在籍したことがある中学校であり、今また大津市民でもある。加えて、あの中学校には繋がりのある知人もいる。子どもが亡くなった直後、そんな内輪の話も耳にしていた。

しかし私は尾木ママの隣に座っていたいと思わないし、ニュース番組の取材対象になって、画面に映りこんでいたいと思わない。自分のコメントを誰かに編集されて、電波に乗せたいと思わない。特にTVというメディアは、目に見える、分かりやすいという呪縛への妥協の産物だと思う。だからずっと距離を置いてきた。ラジオの仕事は長く沢山してきたので、違いはそれなりに了解しているつもりだ。

そう思っているが、一方、自分のしていることを、多くの人たちに知って貰うことは大切だとも思っている。こちらが伝える努力をしなければ、届かない人もこの世界には沢山いる。だからメディアに露出させることが必要な場合はある。この点でラジオは弱い。近年、TV(チャンネル)の選択肢も増えて、みんなが見ているTV番組などもうないが、ラジオはもっと聞いている人が限られる。

だから近年の私の結論は、もう自分のすべき事をしていればよい。他人がそれをどう扱うかは、私に属することではない。そんなことまで意のままにすることなど出来はしないし、そうしたがったりするのも危うい。

だが、東北で展開中の、復興支援家族応援プロジェクト「木陰の物語」漫画展と小冊子の配布は、届かないと駄目である。多くの人にはではなく、必要な人に届いていて欲しいと思う。すると、やはり広報は必要である。だからマスコミから取り上げたいと言われると、受けようと思う。そして、本意の所を曖昧にしないで…と思って向き合う。

あるTV局から、震災復興支援家族応援パネル漫画展について、ローカルの震災復興支援枠で取り上げたいと、大学の広報を通じて打診があった。時をおかずスタッフから電話があり、今すぐ会えないかという。ちょうど仕事場で原稿を書いていたので、先延ばしするより、今の方が時間が取りやすいと応え、20分ほどで女性がやってきた。早速、この八月に京都で、被災地からの避難家族向けに開催したパネル展の話になった。これは昨年からの被災各地で継続開催しているものを、遠く離れた土地で避難暮らしする人たちにも、物語の力でエールをと考えたものだった。

実際、会場に来た被災者が、直接マンガの話ではなく、ひととき、避難暮らしの長期化による家族様々な苦労や事

情を、スタッフに語って帰ったりしていた。

人には皆、それぞれの物語がある。誰が正しいかではなく、一人ひとりが自分の物語を生きている。そんな物語が自然にこぼれ出て、誰かに受け止められるような空間づくりが出来たらというコンセプトの展覧会である。連続開催する東北各地では、そんなことがぼろりぼろりと、各会場にあった。

「カウンセリングだとか、困り事相談とか謳っているわけではない。その場が、巡り合わせで、そんなことの起きる場になれば、何百人がマンガを見に来て下さるよりも、意味は大きいだろうと考えている。誰にも相談などしないで、一人で抱えて生きている人が沢山ある。そんな人たちに、あなたの心の中の物語に呼応するような物語を生きた人が、昔も今も、他の場所にもいます。その方達の物語も聞いてくださいといって示すのは意味があると思う！」

そんな熱い思いを、初対面の記者に語っていた。

そして結論である。「素晴らしい！是非、そういうことが起きている場面を映像に撮りたい」。

ちょっと待ってくれ。そういうことが一つでも二つでも起きることが大切なだと今話しただろう。そんな人が次々現れるわけではないことくらい分かるだろう。しかし彼女は、TVだから画がないと！、という点を譲らない。

思わず、言おうかと思ったら向こうから、「決してやらせではないんですよ」という。いやいや、それがやらせだよ！

展覧会を見に来た人が物語に触れ、会場にいるスタッフに前述のようなことを話しかけている。そういう画を撮りたいのだという。あきれてしまった。それなら会場にずっとカメラを置いて、張り付いておくことだ。

TVだから可視化された情報が…と言われても、そんな都合の良いシーンは無理だ。「それがないと、放送は…」と言うのでしばし議論になった。結局、持ち帰って上と相談してということで帰って行った。

数日後、残念ながら今回は…という連絡があった。その時改めて、貰っていた名刺を見た。TV局タイトルと名前の下に、KK…と書いてある。ローカルニュースを下請けで制作しているプロダクションらしい。

すると、デスクに座っている人から、「画はないの？」「TVだよ！」なんて言われている彼女が浮かんだ。TVだし、可視化が時代のトレンドである事もわかっている。

しかしだからこそだが、この世界には大切だが見えないものがある。見えるものはごく一部で、見えないからないわけではないことを、基本的には可視化を推進するとした上で、忘れないでいたい。

わかりやすさ、可視化は、用心が必要だ。「具体的に見せる！」、「態度で示せ！」、「証拠を出せ」というのは、結局脅しである。

若い人が勢い込んで詰まらないことを言うなぁと思ったが、若いからこそ、辛いこともあるんですよと言われているような気もした。でも、「それがTVなんです！」なんて言われても、合唱する気はまったく起きなかった。そんなこと言いながら、「決して、やらせではないんですよ！」なんて重ねている内に、自分のしていることが空しくて仕方なくなるんじゃないかいと尋ねてあげたかった。

こんな時、歳をとったのも悪くはないなぁと思う。若いということは、まだまだこの世界にアピールをしていかなければならない。80のモノならそれを100にも、120にも見せなければと、聞かされてきた気がする。今の私には、80のモノは80に見せるのがベストだ。そこに生まれるものが一番世の中のためになると思う。そういうことが腑に落ちて分かるために、私たちは齢を重ねるのではないかと思う。

(2012/11/25)

## 1990年11月

11/1 THU 定例受理判定処遇会議。その後続いて職員会議。会議ばかりしてという人があるが、事実伝達や、情報の共有のための会議は、削るべきではない。 unnecessaryなトラブル回避に、定期的なミーティングは不可欠である。それに全体が事実を共有することが、業務の平均的水準を維持する大きな要素になる。次の世代を育てる働きとしても、これは大切なことなのだ。

今、私が会議に出席することは皆無になった。大学院も特別契約教授という別枠で、教授会や大学運営用務は含まれていない。

社会的なポジションを要請されたりもしていないので、会議に出席することもない。もっともこれは、通俗的なレベルでの社会的信頼が低いのかもしれないから、恐縮すべきことかもしれないが、自分ではまったくそう思っていない。

今は何かを引き受けるか受けないかは、自分で決めている。あらゆる事について、そうしようとしている。これはとても清々しい気分だ。

でも最近、嫌ではないが過重だと思うことを一つ引き受けた。そばで見っていた人は、自分で断りなさいと忠告してくれた。

11/2 FRI 地域児童福祉司、心理判定員と3人で、現在進行中でありながら、少々手詰まりなケースの協議をした。昼休み「国連平和協力法」反対のデモに。久しぶりに歩いたが、参加者500人(主催者発表だよ)と思いのほか多い。

午後、講演とワークショップの打ち合わせに出雲児相からH川さんが来所。夕方、家族面接の5回目をした。しょうがない母親だと前評判のあった人が、きちん

きちんと息子二人を連れて通ってきている。

夜は編集者講座。講師がねじめ正一氏。詩人のH氏賞をとった後で、鈴木志郎康氏が講師をしているカルチャー・センターに通った話に、感ずるところがあった。

昼休みデモなんてすっかり懐かしいことになった。この頃そんなことは見かけなくなった。

家族面接もして、編集者講座にも通ってねじめ正一氏に会う。なんだか、今と比べても文化的日常だなぁと思う。

11/3-4 SAT-SUN 文化の日。何もなかった。レンタルビデオを3本借りて見た。「マイライフ・アズ・ア・ドッグ」久しぶりに、登場人物、時間設定、場所に豊かなコンテンツを持った作品を見た感じがした。映画とテレビ作品の違いは、無限に大きいのかもしれない。「セイ・エニシング」青春映画は好んでたくさん見ている。その流れの一本。「スイッチング チャンネル」キャスリン・ターナー主演のTV'局物。三本ともそこそこ面白かった。しかし手帳を見ると、去年の今日、「最後のアドレス」リノ・ヴァンチュラ主演を見ていたのだが、それは89年で90本目の作品だった。しかるに今年はこれで53本。好きなことなら、時間を工夫して量をこなさなくちゃ。

いつの頃からだろう。年間に観ることの出来る映画本数がガクッと減った。映画館に行く頻度も、DVDを観る頻度も大幅に減ってしまった。

観なくても特別に困るモノではないなどと、ありきたりなことが言いたいのではない。そういう変化が何だか詰まらない。

読書量が減らないのは喜びだが、あの頃

は、鑑賞した映画タイトルをメモし、星取り表を付けていたのが懐かしい。今じゃ、見る尻から忘れてしまう。

11/7 WED 行事の関係で、受理判定処遇会議が一日早くなっている。ケースの運びのことで、担当福祉司と判定員に意地悪なことを言った。

何がなんでも上手くやりたいことがあるのなら、考えられるすべてのことを、骨惜しみせずやっておくことだ。結果が出た途端にする後悔の種など、誰にでも判るのだから。失敗の多い人は、プロセスで甘くなることが多いのだ。苦言のせいもあってか、すこし担当のテンションが高まっている。

20年前にこんなことをスタッフに言っていたのか……。厳しい上司だったのかなあ。記憶の中にはこんなシーン、微塵もない。不思議だが記憶機能の身勝手さと思う。どんなことだったのか、それでどうなったのか、気になるところだが、思い出す術がない。

11/8 THU 八木町で「府児童委員研修会」。民生委員と兼んでいる人の多い仕事である。午前中、杉本一義さんの話を聞く。初めて聞いたが、なかなか面白かった。午後、「地域の児童福祉の現状」をテーマに話す。45分の制限時間が短くて、あれもこれも、つい舌足らずになる。

こういう場で話をするとフロアーから、「京都府さんは、どうお考えなのか？」なんて憤りを隠した質問が飛び出す。「京都府さんなんて言われても、そんな奴は居ないぞ！」と腹の中で思いつつ、違和感の中で応えることになる。まあ、おおむねは上手くやり過ぎて、それが組織の一員としての僅かながらの評価にも繋がるのだろう。しかし私にはまったく関心がないし、つまらない質問や、方向違いの矛先は、

それを指摘したくなる自分を隠せない。

11/9 FRI 睡眠不足なのか、体調なのか、とにかくえらいので午前中寝ていた。午後から出て、セミナーのためのレジュメ作りをし、講演のメモなども作った。

夜の編集者講座は小説家・橋本治氏。源氏物語の現代語訳のプロセスを聞いた。このごろ金曜日は、よくビデオを借りてくる。今日は「病院へ行こう」、「木村家の人々」をつくった監督の作品。とにかく面白かった。「計画性のない犯罪」、何かにチラッと書いてあったので覚えていた。

身勝手な公務員の気もするが、長い目で見たとき、社会資源たる人材を、どのように組織が養成したかがポイントだ。京都府はこの時期、私やその部下達を、長い目で見て人材として育てて、今の時代に届けたと思う。

11/11 SUN 娘を連れて近くの遊園地に行った。設備の安っぽいジェットコースターをはじめ、いろいろな乗り物は、整備状態や耐用年数への不安が重なって、中々スリルのあるものであった。

琵琶湖大橋たもとの今は廃業した遊園地だ。最後の頃、スクリー状態のアトラクションは、逆さ向きになると、何かの部品がポロッと落ちた。これにはびっくりしたが、下車時に従業員に渡すと、ちらっと見て捨てた。そこで改めてスリル満点になった。(これはギャグ)

時代のスポットライトを浴びていた場所が、陰りを見せ、やがて廃墟になっていく。こういう事は人にも起きる。ブームを作ったりする人にこの傾向が強いように思う。私はこういう物事のあり方が大嫌いだ。

一方、人生の中で、わが子の手を引いて遊園地に行く時期は限られている。その頻度は、決定的に少なかったなあ。

11/12 MON つかこうへい演出の時代から観つづけている風間杜夫・平田満・石丸謙二郎の芝居「夜明けの花火」を観に、大阪に出た。「即位の礼」とどう関係するのか判らないが、街の人出が本当に少なかった。阪急東通商店街のガラガラの店で寿司を食べた。

こんなメンバーの舞台を観ているのは我ながら自慢だが、それも通じなくなった。小劇場や小さなステージは今も青春に繋がっているんだな。

11/13 TUE 家族面接継続中の少年が、教師を殴ったと報告を受ける。「おっと」と、速やかな対応を求める学校を、気を悪くさせないように、しかしこっちはバタバタしないで、続けていくことが肝要。

月末の児相研セミナーの申込が190人を越えた。宿泊はとっくにオーバー。「嬉しい悲鳴」などと馬鹿な慣用句を使っている場合ではない。会場が狭いのだから困るのだ。多く集めるほど良いみたいな発想は、戒めなければならない。規模がそのものの性格を決定づけてしまうという側面を軽視すべきではない。

対教師暴力は小競り合いも入れると、外から見ている身には日常茶飯に思えた。中学生と大人がもみ合っている空間というのが、不思議な場所に思えて仕方がない。今の私は、中学校も、高校も好みではない。歳を取って短気になってきたのだと思う。

11/14 WED 月例家族療法ビデオカンファレンス。夜、日程変更の編集者講座。筑摩書房の松田哲夫さん。出版企画のはなし、「文学の森」「哲学の森」文庫サイズの「にほん文学全集」などの四方山話。その後、飲み会。三条小橋の「めな

み」。小グループのこういうポジションがごろ僕には居心地がいい。

私は酒を飲まないで、宴会に行くことはない。ちょっといっぱいという機会もない。だからこういう場は限られているのだが、この講座に出るようになって、時々、こういう機会をチョイスするようになった。誰かが熱く話しているのを、そばで聞いている。今の自分とは遠くにあるものだが、興味深いことがあれこれ浮遊する。こういう経験を徐々にしてゆけばいいのだと思い始めていた。何かになろうとして受講していたのではない。受講生はほぼ一般企業人だった。

11/16 FRI セミナーの参加申込が210名を越えた。我々スタッフや近隣の当日参加者はいれないでこの人数だ。全部で200名位を考えていたから、ちょっと困っている。うまくさばかないと、混雑に苦情が出そうだ。

人集めが目的ではないとは分かっているけど、申し込みが多いのを嬉しがっている。

11/17 SAT セミナーの記念品選びに付き合った後、映画「飛ぶ夢をしばらくみない」の封切日に行った。久しぶりだなあ、封切初日なんて。土曜日の午後の映画館、観客12人、新京極はイッパイのひとつみなのに。山田太一の小説は、ものすごく興奮して読んだのだが。映画は、やっぱり駄目かなあ。石田えりのヌードがめざわりで邪魔だった。帰宅してNHK「結婚まで」山田太一脚本をみる。とても面白い。映画よりずっといい。

山田太一さんのドラマは基本的に今もずっと見続けている。お歳をとられたと思うし、往年の輝きには陰りもある。しかしそれでも、事件



ている。よくこれで勤まったなと思わないでもない。しかし一方、この時点で心にあったものと、今の自分の中にあるものに、基本的な変化はない。

その時々々の立場はわかまえたとは思。しかし、立場立場で何でも言えてしまう、心にもないことも出来てしまうのはごめんだった。

極力、何かのフリをして生きることはしてこなかった。自分の中に公務員退職の意志など微塵もなかったが、行動は今の自分に向かっていたのだなぁと読みながら思った。

そして、この時点で自分はとても良く機能する公務員だと信じていた。

11/21 WED 久しぶりに新幹線でワープロを叩いている。読売広告大賞の授賞式に行く車中だ。今年は欠席するつもりだったのだが、代理出席についての電話問い合わせを受けているうちに、気が変わった。巧くいっていることは変えないことである。今年の式は、福田繁雄さんの講演と、受賞作品一つずつに寸評があって、いいものだった。その後新宿に回って、映画「櫻の園」を見た。

どういうわけか、この読売広告賞では二年連続で入賞していた。会場では、「連続入賞というのは凄いことです」と、何人もの方に言われた。実際、連続受賞している人はほとんどなかった。

漫画家だけの賞ではない。ユーモア広告部門の作品として連続受賞していた。前回書いた読売国際国際マンガ大賞は二十年応募し続けたが、こちらは連続受賞したせいで三年目にはもう応募しなくなった。

今考えてみると、簡単に結果が出ないものの方が、自分のためになると思える。出ない結果を追い求めながら試行錯誤する間に、確実に人は成長する。それは夢が成長

するということでもある。

\*\*\*\*\*

どういうわけだろう。この後一週間の日誌記録がない。大会準備に大わらわで、記録していなかったのだろうか？

\*\*\*\*\*

11/30 FRI 第16回児相研セミナーの開会。順調な滑り出しだが、外は季節はずれの台風。基調公演は出演の役者が驚くほどの大成功。客が作った部分の大きさに改めて感じ入る。講座も好評。

交流会だけが、マネージャーの甘い見込に、一杯食ってとんでもない混雑。後で調整してくれたが、多少問題残し。まぁプログラムじゃないところでよかったか。

長々準備してきた大会は、大成功で終わった。懇親会は会場での宴会などにしないで、嵐山のレストランを、貸し切りという約束で予約していた。ありきたりな宴会パターンを考えると、なかなかセンスの良いアイデアだと思っていた。

しかし当日行ってみると、二階部分に一般客を入れていて、懇親会の参加者が多めになった分、対応キャバが不足した。わずかに数人のお客のために、全体の印象が悪くなってしまった。その客達も、ほぼ貸し切り状態の喧噪の中で食事しても、落ち着かなかっただろう。

店の事情もあったのかもしれないが、「約束が違うじゃないか！欲張るから、みんなの評判を落とすことになるんだ！」と腹の中で怒っていた。